

ロシアの満州・朝鮮進出

事件は終わり、八カ国と清国との講和条約も結ばれ、各国の軍隊はそれぞれ引き上げたのに、ロシアだけは兵を引きません。各国は連名でいくたびも抗議しますが、兵を引くどころか、満州に増兵し、恒久的陣地を構築します。そればかりか朝鮮にまで乗り出し、三十九度線まで兵を入れてきました。当時朝鮮は、日清戦争以後は自主独立を保障されたにもかかわらず、一向に独立の気概なく、大院君派と王妃との内紛が絶えぬありさまでした。三国干渉で、日本は「臥薪嘗胆」を合言葉に民族意識は高まり、「遼東還付の詔勅」を戴き、民族の団結と軍備の拡張に、君民一体となって取り組みました。しかし、朝鮮は日本が三国干渉に屈服すると、親日派は動揺して親日内閣は倒れ、代わって親露派が勢力を拡大します。ロシア公使ウェーバーは閔妃一派に接近し、これを懐柔して、ロシア軍をソウルに導き入れます。ロシア皇帝直属の《鴨緑江木材会社》に名を借りて、満州や竜巖裏に偽装した軍隊を送り込み、ここに要塞を築きます。極東大守アレキセーエフは、さらに朝鮮南端の巨済島や馬山裏に手を伸ばして来たのです。巨済島は日本の対馬の正面に位置し、晴れた日には手に取るように見える島です。ここにロシアは軍港を作り、要塞を築こうというのです。まさに日本列島の腹部に突きつけられた刃であります。

外相の小村寿太郎はロシアとの交渉で、「満州は中国の領土ゆえ何も言わないが、朝鮮に兵を入れたり要塞を築くことは中止して欲しい」と懇請します。これを「満鮮交換交渉」と言います。しかしその交渉は無駄でした。そのころロシア公使ウェーバーは、ロシア兵二百名をロシア公使館防衛の名目で引き入れ、親露派と謀って、国王を王宮から奪取して、ロシア公使館に移しました。それから約二年間、朝鮮国王はロシア公使館の中で政務を執るといふ異常事態が続くのです。ということは、朝鮮政府は完全にロシアの傀儡に成り下がったということです。